（一） 第819号 【昭和27年9月25日】【第三種郵便物認可】 THE MIIKE （毎月1日、16日発行） 昭和42年3月1日（水）

発行所
三池炭鉱労仂組合
大牟田市不知火町2
電話㊂3033番
㊂3034番
編集兼発行人 山下 開
年間600円 送料共

生き証人守り抜き責任を追及する

炭労大会でも訂正訴える

（第七回中央委）

二月十七日、炭労と労仂省間で結ばれた覚について生じた炭労と三池労組間のくいちがいについて態度を決定する中央委員会は、二月二十四日開かれ、満場一致方針を決定した。

了解事項の骨抜き許さず

具体的なくいちがいの問題点については、二月二十五日付「みいけ」号外で既報の通りであるが、それに対する三池労組の態度はつぎの通りである。

入院患者の取り扱いについては十一月協定をくずしたものであり、いまから医師同志の話し合いで入院か退院かを決定する段階で、すでに入院患者でないような覚を結ぶことは許されない。

着到の問題については訓練の内容が回復訓練であれば場所にはこだわらないが、転場復帰訓練であり、しかも新労組と同じでは十一月協定から大きく後退したものであり、認めることはできない。

このようなことを認めることは特別立法だけでなく、対会社要求に悪影響をおよぼし、ひいては長期抵抗路線の内容にもせまる問題であり、炭労にこの部分の破棄を求める。

こんごはあらゆる交渉に三池の代表を加えることも同時に要求する。

意志統一と新労組対策を

こんごの具体的方針については つぎのように決定された。

一、内部討論の不十分さを反省し、あらゆる転場、地域でCO闘争の意義と現状を意志統一し、その決意を中央交渉団に表明する。（電報）

二、長期抵抗路線の主要な柱である新労組対策を強化する。

三、主婦会としてもCO問題に対する討議を早急にとりくむ。

四、あらゆる戦術で外部に訴える（具体的には執行部に一任）

〝ウエの人のいうとおり〟

職場で係員は何かというと「上でそう決っているので…」という。

アタマにきたHさん「ナンカお前は、インバイと同しこつ」係員「なしですか？」Hさん「ウエの人のいうごつじゃんか」

成功した春闘拠点行動

高まるCO問題への関心

昨年にひきつづき、九州各県春闘共闘会議・拠点共闘会議の主催のもとに、二月二十五―二十六の両日にわたって、大牟田で開催された〝春闘の勝利をめざす、九州青年労仂者の拠点行動〟は、〝一九六七年春闘うたごえ大会〟も加わっていたせいもあって、七千五百人もの青年労仂者が結集されるほどの盛大さを見せた。

こんどの行動が、それぞれの単産・単組がこれからすすめる春闘に直接的に反響をひろげる、ということにはならないにしても、しかしすべてのたたかいの先頭に立つべき青年労仂者の前進の上に与えた影響は、昨年よりはるかに大きいようだ。事実こんどの行動に初日は交流座談会に、また翌日は春闘うたごえに参加したという、三化労組の一青年部員は語るのである。

「なるほど、よそからきてもらった仲間たちに泊まってもらう場所が、そのときになってからわかったり、うたごえ参加の計画がかわっていたりして、とまどったこともあったですが、それでもこんどの交渉を通じて何か知らん、明るい気持になりました。これが自信というもんでしょうか。これからは大いにがんばるつもりです」。

とりあえずこんどの行動でよろこばれていることをあげれば、まず第一に、これまで三池労組の組合員の家々にばかりかぎられていた〝民泊〟を通じての交流運動が諸単組にまで広がったことがあげられる。

約七百人の民泊者のうち、三化＝三十人、市教組＝十一人、市職＝十人、三合＝六人、そのほか東圧、大地評・荒地評などがその例である。しかしそれらの民泊者のロから「オレたちは三池の労仂者と交流にきたのに…」「CO患者の家族の人びとの話が聞きたかった…」などの声がでて、そこかしこの受け入れ側をとまどわせることが少くなかったが。

第二に、昨年とかく目についた物見遊山ふうな姿勢が影をひそめて、ことしは終始真剣さがあふれていた。

第三に、「三池の労仂者と交流を強く求めた」声が示すように、これからなんとかしてたたかいを強めてゆこうとめざす、青年労仂者としてのエネルギーの芽生えが顕著だった。

以上のことなどがあげられようが、いずれにせよ年とともに確かな歩調をもって前進してゆく青年労仂者の姿を目撃することのできた点心強く、「こういう交流は大いにやってほしい」（三化の一青工部員）のである。

7,500名の若者が九州全域から集まつて開かれた〝春闘うたごえ大会〟

（2月26日 於体育館）

CO問題は妥協できない

主張

攻撃は体制的

四十一年の一月、労仂省との間に三年たっても一方的に労災補償は打ち切らないという了解事項ができて以来、六月の国会決議、十一月の了解事項と、三川大爆発による犠牲者をいかにも大切にするというとりきめはいくどとなくいい交されたが、つねに権力と資本の側によって打ち破られてきた。

このうらには「福岡地検の黒い霧」とまでいわれた検事を異動させてまで行った爆発の刑事責任の不起訴処分や、御用学者山田某の三井の殺人罪擁護のために出された「風化砂岩説」があったし、さらには三池闘争時の「生産阻害者」というマスコミとまったく同じ役割をはたしている「組合原性病」という労仂省の悪宣伝など、まさに三井と政府が一体となったガス患者マッ殺の大陰謀が仕組まれてきたのである。

このかげにかくれて三井鉱山は、渡辺、池田、呉比ら大量虐殺の現場責任者を重役に据え、より一層の合理化体制をつくり上げてきた。

ねらいは石炭政策の貫徹

この陰謀はただ三池大爆発による大虐殺事件を昔の語り草にしてしまおうとしているだけではない。

昭和三十年からはじまった石炭合理化政策は、この十二年間つねに企業の国家資金による再建であったし、そのための労仂者への犠牲強要であった「企業の経理を改善することが最大の保安対策」とされてきたのである。

しかし、これでも資本は満足しなかったのである。昭和四十年以来北炭夕張、伊王島、山野鉱とつづいた大量虐殺をも何ら反省することなく、現在では「抜本策」という名前の石炭政策のより徹底化がはかられようとしている。

この五回目の石炭政策の第一歩として、仂けない者のクビ切り、殺人合理化の生き証人のマッ殺がはかられようとしているのである。

生命と生活を守り抜く

われわれは過去七年間、労仂者の生命と生活を合理化から守り抜くことを基本に、長期抵抗路線をしき、反合理化闘争を闘い抜いてきた。

殺人合理化の生き証人、ガス中毒患者を守り抜き、三井と資本の責任を徹底的に追及することは、労仂組合の譲ることのできない使命である。

いまこそ、すべての転場・地域で討議を起し、CO問題を闘いの中心にすえよう。

われわれの内にもこんな弱さがある

三川一主婦

CO問題は、自分たちの転場も生活も苦しいので、組合ははやくなんとかしてくれ。という気持の人もいます。

二月二十四日の中央委員会の決定でもこんどの闘いがいっそう重要だから、まず三池労組の中部がしっかり意志統一してやろうということが決定されましたが、まだまだ三池労組の内部にもこんな弱点があるということを、みんなで話し合い、少しでも体制を固めていくべきだと思います。

CO問題は、ただ患者や家族だけのことではなく、三池労組全体のたたかいの柱だと思います。だから、CO問題にたいする闘いの欠陥は私たち全体の欠陥でもあると思いますので、あえてここに書きたいと思います。

一番よく聞くことに、「CO患者は期末手当は平均もらっている」ということです。仂いている人は平均以下しかもらわない人がいるのに、あの人たちは平均もらってヨカネということです。

「組合がガス患者ばかり良くする。あの人たちは賃金も百パーセント補償されてよかろだい」という人もいます。

早くなんとか解決してくれることにはならないにしても、しかしすべてのたたかいの柱だと思います。だから、CO問題にたいする闘いの欠陥は私たち全体の欠陥でもあると思いますので、あえてここに書きたいと思います。

一番よく聞くことに、「CO患者は期末手当は平均もらっている」ということです。仂いている人は平均以下しかもらわない人がいるのに、あの人たちは平均もらってヨカネということです。

「組合がガス患者ばかり良くする。あの人たちは賃金も百パーセント補償されてよかろだい」という人もいます。

早くなんとか解決してくれることにはならないにしても、しかしすべてのたたかいの先頭に立つべき青年労仂者の前進の上に与えた影響は、昨年よりはるかに大きいようだ。事実こんどの行動に初日は交流座談会に、また翌日は春闘うたごえに参加したという、三化労組の一青年部員は語るのである。

「なるほど、よそからきてもらった仲間たちに泊まってもらう場所が、そのときになってからわかったり、うたごえ参加の計画がかわっていたりして、とまどったこともあったですが、それでもこんどの交渉を通じて何か知らん、明るい気持になりました。これが自信というもんでしょうか。これからは大いにがんばるつもりです」。

とりあえずこんどの行動でよろこばれていることをあげれば、まず第一に、これまで三池労組の組合員の家々にばかりかぎられていた〝民泊〟を通じての交流運動が諸単組にまで広がったことがあげられる。

約七百人の民泊者のうち、三化＝三十人、市教組＝十一人、市職＝十人、三合＝六人、そのほか東圧、大地評・荒地評などがその例である。しかしそれらの民泊者のロから「オレたちは三池の労仂者と交流にきたのに…」「CO患者の家族の人びとの話が聞きたかった…」などの声がでて、そこかしこの受け入れ側をとまどわせることが少くなかったが。

第二に、昨年とかく目についた物見遊山ふうな姿勢が影をひそめて、ことしは終始真剣さがあふれていた。

第三に、「三池の労仂者と交流を強く求めた」声が示すように、これからなんとかしてたたかいを強めてゆこうとめざす、青年労仂

五日に大地評駅伝

恒例の大地評駅伝は第六回目をむかえ、五日に行なわれる。

今年も各単産からチームが参加して行なわれるが、三池労組からも二チームの参加が予定されている。